

第2学年 社会科（地理的分野）学習指導案

日 時：平成15年9月10日（水）5校時
 場 所：宮古市立津軽石中学校2年B組教室
 対 象：同校 2年B組 23名
 指導者：同校 教諭 大久保 浩 一

- 1 単元名 「さまざまな面から見た日本」 ※教科書：東京書籍「新しい社会 地理」
 2 小単元名 「日本の自然環境」
 3 単元と小単元について

単元は、下表のように5つの小単元から構成されている。世界的視野から日本を一つの地域として追究することによって、また、日本全体の視野から大まかな国内の地域差を追究することによって、わが国の特色をとらえさせるとともに、地域間を比較し関連付けて地域的特色を明らかにする視点や方法を身につけさせることをねらいとしている。

本小単元「日本の自然環境」は、単元の学習の初めに位置づけられている。単元のねらいを達成するため、わが国の地域的特色を自然環境の面から追究し、理解させることを主なねらいとしている。

【単元の構成】

No.	小単元名	時間	学 習 内 容
1	日本の自然環境	6	世界的視野から見て、日本は環太平洋造山帯に属し大地の動きが活発であること、温帯の島国、山国で降水量が多く、緑におおわれた国であること、自然災害が発生しやすく防災対策が大切であることといった特色を理解させるとともに、国内では地形、気候などにおいて地域差がみられることを大観させる。
2	日本の人々の暮らし	4	世界的視野から見て、日本においては比較的ものの豊かな中で人々が暮らしていること、また、近代化や国際化の進展などにより伝統的な生活・文化は変容していること、外国から入ってきた生活・文化は日本の環境条件に対応させて取り入れてきたことといった特色を理解させるとともに、国内では生活・文化の地域による差異が次第になくなりつつあるが、一方で各地に特色ある生活・文化がみられることを大観させる。
3	世界と日本の人口	4	世界的視野から見て、日本は人口が多く、また、人口密度が高く、平均寿命が長い国であること、少子化、高齢化に伴う課題を抱えていることといった特色を理解させるとともに、国内では平野部に多くの人口が集中し、過密・過疎地域が見られることを大観させる。
4	世界と日本の産業・資源	6	世界的視野から見て、日本はエネルギー資源や鉱物資源に恵まれていない国であること、土地が高度に利用されていること、産業の盛んな国であることといった特色を理解させるとともに、国内では地域の環境条件を生かした多様な産業地域がみられること、環境やエネルギーに関する課題などを抱えていることを大観させる。
5	広がる地域間の結びつき	4	世界的視野から見て、日本は国際間の交通・通信網の整備が進んでいること、世界の各地と強く結びついていること、結びつきの深さや内容は相手の国や地域によって特色がみられることを理解させるとともに、国内でも交通・通信網の整備が進んでいること、各地の時間的な距離や位置の関係が大きく変化しつつあること、人や物資の移動には地域的特色がみられること、各地域の特色は他地域との結びつきの影響を受けながら変化していることを大観させる。

生徒の実態

生徒は、小学校第5学年で日本の地形や気候の概要について学んでいる。西には北上高地を望み、宮古湾に面した、自然豊かな土地に暮らしている生徒にとって、日本が四季の変化に富む自然豊かな島国であることについては実感として理解していると思われる。しかし、生徒たちの知識の範囲は狭く、「世界的な視野から日本を一つの地域として追究することで自然の特色をとらえたり、地形や気候の特色と自然災害を結びつけ、その防災対策について考えたりできる」ところまでは高まっていないと思われる。

「リアス式海岸」などの用語は多くの生徒が知っているが、なかには、本単元の学習を進めるにあたって必要な基本的な地名も定着していない生徒もおり支援が必要と思われる。

5 単元の指導にあたって

本単元「さまざまな面から見た日本」は、前回の「世界の国々の調査」で学習した、国家規模の地域的特色をとらえる5つの視点から構成されている。本小単元は、日本の自然環境を視点としている。「世界の国々の調査」で取り上げたアメリカ、マレーシア、フランスなどの自然環境と比較しながら、日本の地域的特色と日本国内の地域的特色を理解させるよう指導を進めたい。なお、統計資料や主題図の読み取りなど、作業的な学習をしながら基礎的な知識が定着するように進めたい。

本小単元の最後には、自然災害について扱う。自然災害の種類については、地形や気候と大きく関わっているもので、地形の学習と気候の学習のところで、そのつど学習を進めるようにし、防災対策についての話し合いに重点を置く。身近な災害を例に、自然災害の防災対策を考える視点を明らかにできるように指導したい。

一斉学習では、発言が特定の生徒に偏る傾向がある。小集団を組み、効果的に指導を進めたい。また、基本的な地名やその位置等については、白地図を使った作業を通して確実に定着させるようにしたい。

6 単元の指導目標

世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の諸地域の特徴を追究し、我が国の国土の特色を様々な面から大観させるとともに、地域の規模に応じて、また、地域間を比較し関連付けて、地域的特色を明らかにする視点や方法を身に付けさせる。

7 単元の指導目標に関する評価の観点とその規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
日本の国土の特色に対する関心を高め、それを世界的視野と日本全体の視野に立って様々な面から意欲的に追究し、我が国の国土の特色をとらえようとしている。	日本の国土の特色を世界的視野と日本全体の視野に立って様々な面から追究するとともに、地域間を比較し関連付けて地域的特色を明らかにする視点や方法を考察している。	世界や日本の地図や統計その他の資料を収集し、様々な面から日本の国土の特色をとらえるための有用な情報を適切に選択して活用するとともに、我が国の国土の特色を追究し考察した過程や結果をまとめたり、説明したりしている。	世界的視野と日本全体の視野に立って様々な面からとらえた日本の国土の特色とともに、地域間を比較し関連付けて地域的特色を明らかにする視点や方法を理解し、それらの知識を身に付けている。

8 学習内容毎の評価規準並びに判断基準 ※本小単元のみ掲載した(2~5は省略)

学習内容 ()は累計時間	評価規準 上段は観点、()は評価方法	判断基準		
1 日本 の 自然 環境	①変化に富む 世界の地形 (1)	関	A	海底の地形についても調べようとしたり、記入した山脈にある山について、高さのランクを表にまとめたりもしている。
			B	主な山脈とあわせて、アルプス・ヒマラヤ造山帯と環太平洋造山帯を白地図に記入し、地盤が不安定な地域をとらえようとしている。
	②日本の地形 (2)	思	A	地形の特色から、災害の起こりやすい地域の分布を示したり、世界の地形と日本の地形の違いを図で説明したりしている。
			B	日本のおもな山脈の高さや河川の長さ、幅を調べて世界のそれと比較することにより、日本の地形の特色をつかみ、日本の災害の特色と関連させ考察している。
	③世界から見た 日本の気候 (3、4、5)	知	A	日本の気候に季節風・梅雨・台風などが地域的特色をもたらしていることも記述している。
			B	世界の気候が5つの気候帯に分けられ、それらが赤道をはさんで規則的に分布していることと、その中で、日本は温帯にある国であることを記述できている。
		技	A	植生の分布や海流の分布などにも触れた記述が見られる。
			B	いくつかの雨温図を描いて、それらが日本のどの地域の特色を表すのか、指摘できている。
	④自然災害と 人々の暮らし ※本時 (6)	思	A	防災のポイントをおさえ、他の自然災害への対処法についても考えようとする記述が見られる。
			B	これまで行われてきた県・市による津波対策について調べ、記述できるとともに、地域・家族・個人のレベルでの津波対策について考えを発表できている。

9 本時の指導

(1) 本時の目標

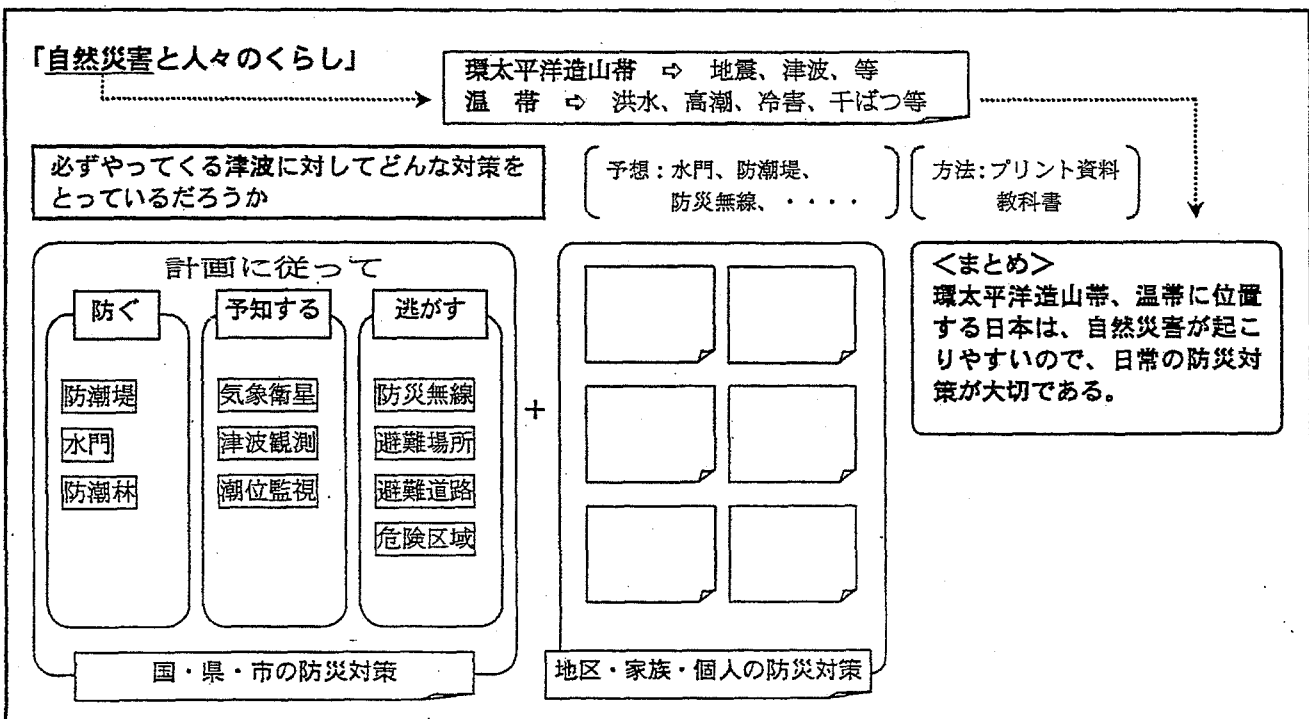
自然災害が起こりやすい日本に暮らす上で大切なことは何かについて、地域における津波対策を調べるなかで考えることができる。(社会的な思考・判断)

(2) 本時の展開

段階	学習活動・おさえた事項	形態	指導上の留意点・資料(※)・評価(☆)
導入 7分	<p>① 学習内容の確認 「自然災害と人々の暮らし」をノートに写し、学習内容を確認する。</p> <p>② 既習事項の想起(日本の自然災害) 地殻変動によるものと気象現象によるものに分類された、日本に起こる災害の種類を確認し、日本が自然災害の多い国であることを想起する。</p> <p>③ 問題の把握(津波による宮古の被害) 海に面した宮古は、過去に津波によって大きな被害を出したことを、そして、将来必ず大きな津波が来ることを知り、危機感をもつ。</p> <p>④ 学習課題の設定(確認) 感じた疑問から、課題を設定(確認)する。「どんな対策をとっているのだろうか。」</p>	一斉	<ul style="list-style-type: none"> テーマを教科リーダーに板書させておく 講師を紹介する→あいさつ 前時に使用した紙板書を用い、短時間で。 環太平洋造山帯 ⇨ 地震、津波、等温帯 ⇨ 洪水、高潮、冷害、干ばつ等 動画を用い、生命や財産を奪い去る津波の恐ろしさをつかませる。 ※津波のVTR 過去100年間に来襲した三大津波について、西暦年、時間、死者数を示す。津波来襲の間隔年をつかませるとともに、研究の結果、将来大きな津波が必ず起きることを知らせ、さらに危機感をもたせる。 ※統計図 生徒から出た言葉で課題を設定したい。 板書し、ノートさせる。
	必ずやって来る津波に対して、どんな対策をとっているのだろうか。		
展開	<p>⑤ 予想・追究方法の確認 答えの予想をするとともに、課題を解決するためには、何について調べ、考えればよいかについて確認する。(3分) <予想> 防潮堤の建設、水門の建設、防災無線・・・ <追究方法> 予想について確かめながら、津波の被害を防ぐために実際に行われている対策を調べる。</p> <p>⑥ 課題の追究 ア 自治体レベルでの津波対策 (12分) ・教科書、プリントをもとに、津波対策として自治体が行っていることを調べノートに書き出す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 防潮堤の工事、水門の工事、防災無線設備の建設、避難場所の確保、防災マップの作成、危険地域の指定、津波観測、消防団等防災組織の編成、防災訓練、他 </div> </p>	一斉 個別	<ul style="list-style-type: none"> 予想は「水門の建設」など、目にして知っているものに限られていると考えられる。あげられた予想について、受容しながら、講師とのやり取りを見せる(「これだけですか?」)ことで、さらに調べる必要があることを確認する。 予想、追究方法について板書する。 ※プリント：田老町の津波後の防災計画、防災施設等の写真 自治体という用語は使わず、「国・県・市」とする。 ☆自然災害が起こりやすい日本にあって、どのように暮らしていけばよいかを、地域における津波対策を調べるなかで考えることができたか。(5-(1)・(2)についてノートの記述・行動をみる) 判断基準に照らし・・・Cの生徒には →調べるためには資料のどの部分に注目すればよいか教えたり、地域・家族・個人レベルでの対策について考える視点を与えたりする。 Bの生徒には →津波対策について調べたことを、内容から判断し一般的な防災のポイントをいくつかつかむことができるように助言する。 発表内容を板書するが、「防ぐ」「予測する」「避難させる」などのキーワードで、調べたことをくくっていく。 国や県、市が進める防災対策であることを確認する。 市の防災担当者である講師に、「これで万全か」振る。
	<ul style="list-style-type: none"> 調べたことを発表し合う。 調べたことを確認し合い、さらに、整理することで一般的な防災のポイントをつかむ。 行政(国や自治体)レベルの防災対策だけでは万全ではないことをつかむ。 	一斉	

35分	<p>・国や自治体の行っている防災対策だけでは不十分なことから、地区・家族・個人レベルでの対策を探る必要があることをつかむ。</p> <p>イ 地区・家族・個人の津波対策 (15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治体以外の対策について考えられることをグループ内で出し合い、カードにまとめる。 <p>〔自主防災組織、防災訓練への全員参加、非常時のための備品のチェック、他〕</p> <ul style="list-style-type: none"> グループで話し合ったことを発表し合い、見方を広める。 <p>6 課題の解決 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 講師から評価をしていただくとともに、地域の防災対策の実際について聞き、考えをさらに深める。 	<p>がんばって調べたことについて認めていただきながらも、大災害は、人の予想を上回る被害をもたらすこと、そして、阪神大震災の教訓から、大災害時には、消防機関の消火活動、救急・救助活動は著しく低下し、被災地域の全域を救うことができないことが考えられることを話していただく。 ※阪神大震災の写真</p> <p>小集団</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人の考えを発表し合い、グループとしての考えをまとめさせる。発表者、記録者を決め、全員が発表できるようにする。 ※防災マップ カードはできたグループから、黒板に貼らせる。 話し合いの様子を観察し、評価する。 <p>一斉</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表を聞いて、「なるほど」と思われたこともメモさせる。→発表に添える(相互評価)。 専門家としての立場からグループの発表について評価していただく。(外部評価：肯定的に) 地域の防災対策の実際については、自主防災組織、防災訓練を中心に話していただく。 ※ファイル「日ごろから災害に備えよう」 「なるほど」と思われたことをメモさせる。
終末 8分	<p>7 本時のまとめ</p> <p>学習したことについて、分かったこと感想・さらに学習したいことをノートに記入し、発表し合う。</p> <p>「環太平洋造山帯、温帯に位置する日本は自然災害が起こりやすいので、日常の防災対策が大切であることがわかりました。」</p> <p>「津波の恐ろしさについて、初めて知りました。自分も避難経路の確認をするなど、普段からの備えをしたいと思います。」</p> <p>8 次回の確認</p> <p>次章に学習することを確認する。</p>	<p>一斉</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習を通して得た自分としてのわかったことや感想をまとめ、発表させる。(自己評価) 発表をもとに、まとめを板書する。章の最後の時間なので、授業のはじめに用いた紙板書を指し、前時までの学習にフィードバックしながら、まとめる。 講師へのお礼、あいさつ

(3) 板書計画



「自然災害とくらし」

2年 組 番 ()

【資料-1】過去100年間に起きた三陸沿岸の大津波

西暦	前回からの年数	日時	程度、被害
1896年 (明治29年)	40年	6月15日 午後8:00	「明治三陸大津波」 小地震、大津波 死者数約20,000人
1933年 (昭和8年)	37年	3月3日 午前3:10	「昭和三陸大津波」 大地震、大津波 死者数約2,600人
1960年 (昭和35年)	27年	5月24日 午前4:00	「チリ地震津波」 地震なし、大津波 死者数61人、赤前地区が大被害
現在	43年	将来、必ず大津波が襲ってくる！ ※宮城県沖で大きな地震が30年以内に98%の確率で発生すると の長期予報も出ている。	

(「宮古消防団史」などを参考に作成)

【資料-2】田老町の災害復興計画 (「地域ガイド 津波と防災 ~語り継ぐ体験」を参考に作成)

宮古のとなりまち田老町も津波の被害を受けたまちです。「津波太郎」として津波から逃れることができない田老町。町民は「この地を去るか」「津波と対決するか」の決断にせまられました。

田老町民は、津波の被害を乗り越えるため、「対決する」対策を立て、防災のまち作りを進めてきました。町民の努力により、防潮堤を基盤とする、「防災田老」が生まれました。

1 昭和三陸大津波後の災害復興工事計画

(1) 防潮堤の築造と避難道路の設置

「住宅の高地移転」を考えたが、5,000戸の家屋を移転する適切な高地が見つからず、防潮堤の築造と避難道路を設けることとした。

(2) 長内川・田老川の護岸工事計画

(3) 防潮林の植栽

2 チリ地震津波後の復興計画

(1) 態度

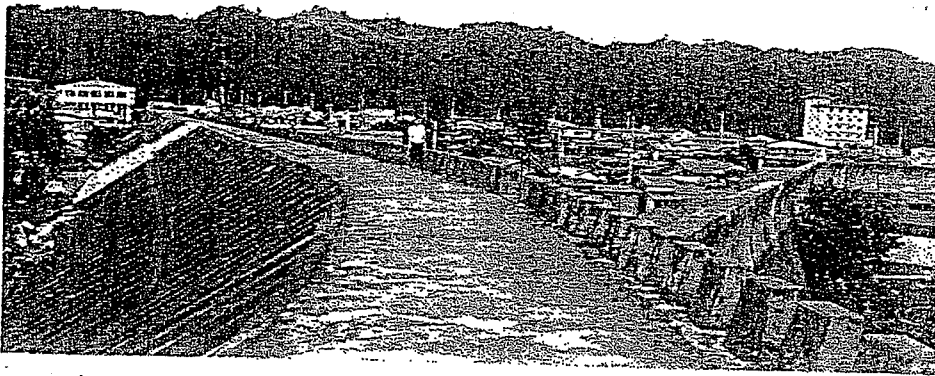
津波はもちろん自然現象であるが、社会現象でもある。チリ地震津波では、昭和8年津波の経験を生かしたところは巧みに災害を避け、それを生かさなかつた所は、予想外に大きな被害を被った。自然現象としての津波は防げないかもしれないが、社会現象としての津波を払う努力を痛感した。

(2) 予報

津波の予報は進歩してきている。警報伝達と避難訓練ができれば、人命を保護することは困難ではない。避難は夜間手探りでも混雑しないように、避難場所、避難経路、避難方法を研究しておくことが必要である。また、同時に漁船などの避難も訓練しておく必要がある。



【資料-3】参考写真（「地域ガイド 津波と防災 ～語り継ぐ体験」より）



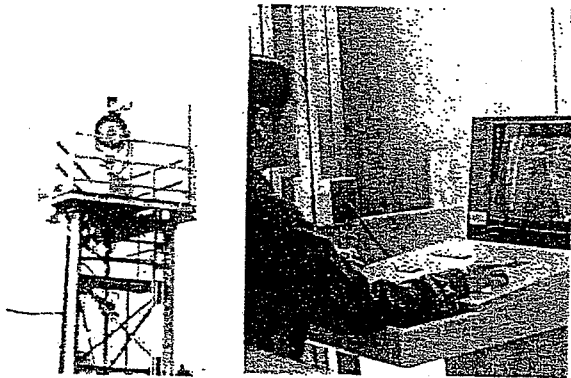
田老万里の長城「防潮堤」



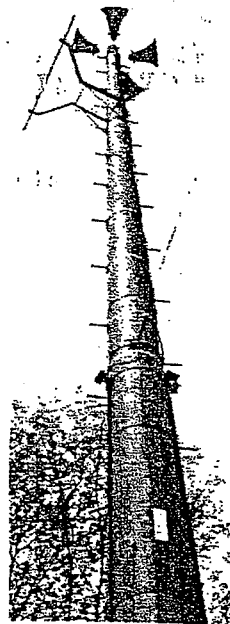
田代川水門



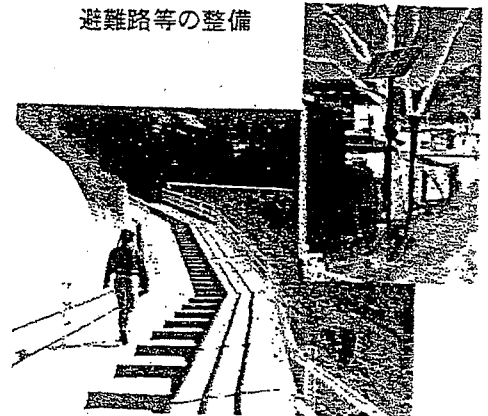
防潮林



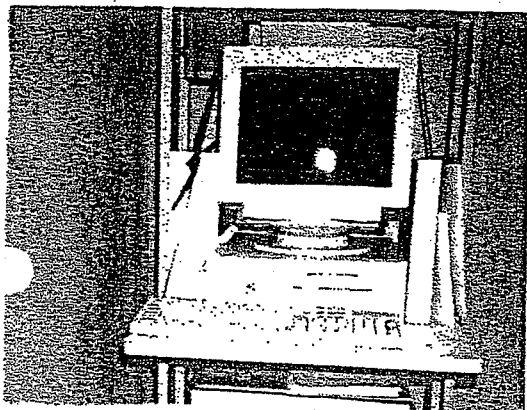
防災行政無線



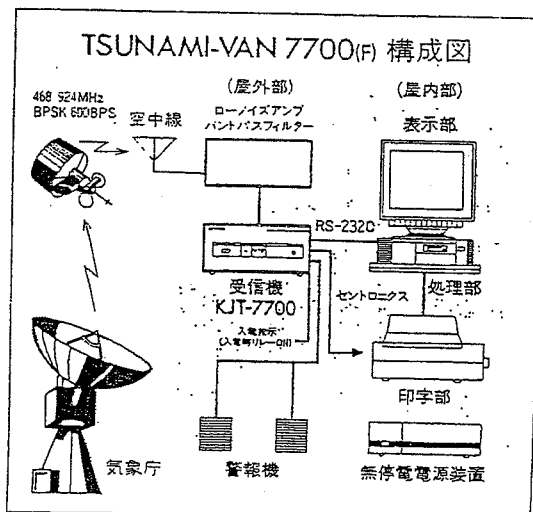
避難路等の整備



津波観測システム



高台への避難路には階段や手すりを、更には夜間の避難も想定して太陽電池による照明灯も整備している。



避難しやすいようにと考慮した道路の隅切りは、現在では交通安全に大きく貢献している。

地震

目ざらから 災害に備えよう!

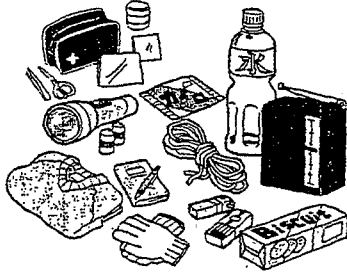
地域の防災力を高めるには、
目ざらからの備えと、
家族や地域との
コミュニケーションが大切!



ナマス博士

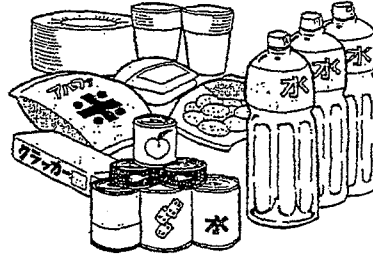
非常用品を備えておこう!

災害に備える非常用品は、緊急避難のときを持って逃げる「非常持出品」と
災害後の生活をささえる「非常備蓄品」に分けて備えましょう。



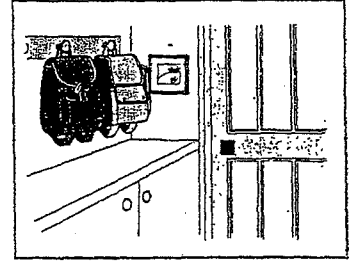
非常持出品

水、ビスケット、ラジオ、懐中電灯、予備の電池などを用意しておきましょう。

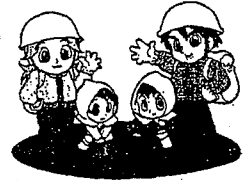


非常備蓄品

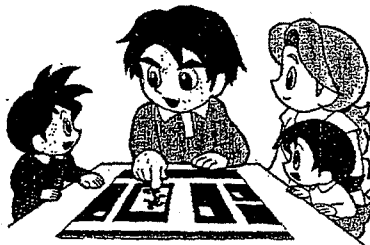
非常備蓄品は、最低3日分用意しておきましょう。1年に1回、定期的な入れかえや補充も大切です。



非常持出品は、すぐ持ち出せる場所におきましょう。

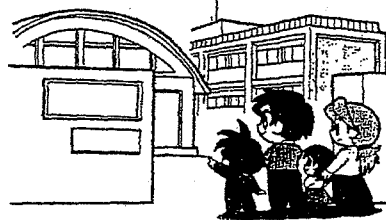


避難について確認しよう!



家族防災会議

役割分担、避難場所、避難場所までの道順、家族との連絡方法などを家族全員で確認しましょう。



避難場所・道順の確認

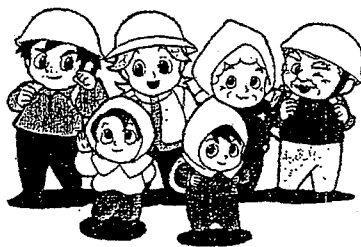
避難場所はどこか、道順をどうするかなどを確認しましょう。

津波が来たときの 避難場所・道順

海辺では、津波が来たときの避難場所や避難場所までの道順を確認しましょう。

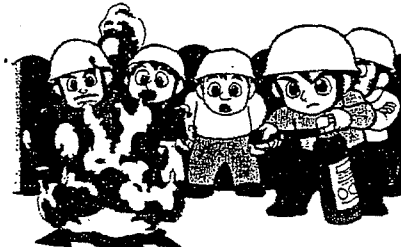


地域のことは地域で守ろう!



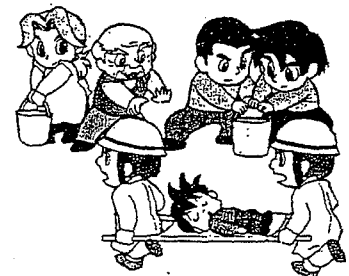
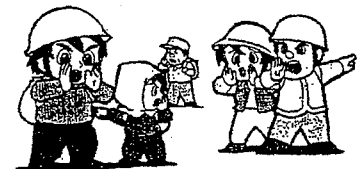
自主防災組織

地域とのコミュニケーションを深めておきましょう。



防災訓練

地域で行われる防災訓練には、積極的に参加しましょう。



中央防災会議／総務省消防庁／地方公共団体
総務省消防庁URL <http://www.fdma.go.jp>